

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2017 鶴見英成

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



20171218

学術俯瞰講義 2017年Aセメスター
「文化資源、文化遺産、世界遺産」

鶴見英成
(総合研究博物館)

アンデス文明研究の成果と課題②博物館をめぐって



盗掘された南部海岸の遺跡

前回のミニッツレポート

- ・遺跡が遺跡として認識されていないこと、
- ・遺跡は大切であるという認識が共有されていないことに驚き
- ・考古学者のエゴイズムと思われるかも



「神殿更新」

- ・「式年遷宮みたい」 例えば伊勢神宮は20年周期
- ・「イニシエーション(通過儀礼)の一環では」

建築のメンテナンスは、関係者総出の年次行事のようなものだったという説がある。

より大きな改変のサイクルは未解明だが、それが解明されると個人単位の人生との関わりが出せるだろう。

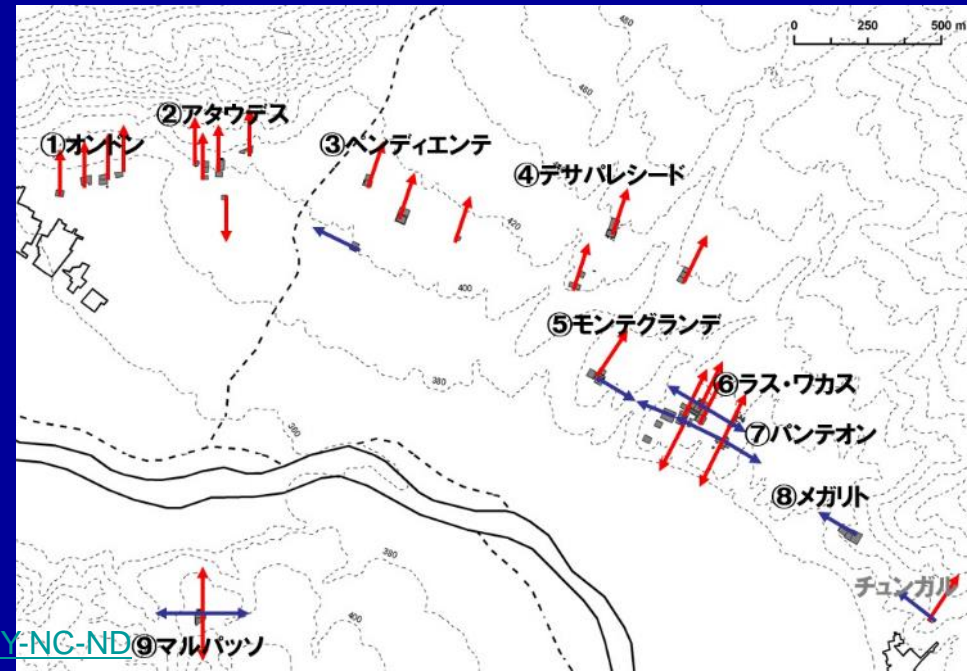
- ・より小さくなることは？

神殿の定義によるが、例えば(礼拝堂のような)部屋を指すなら前のものを埋めた上により小さなものを造ることはありえる。

地点を移して新規に造った場合は、最初はたいてい小さい。ほどなく機能停止すれば小さい神殿遺跡として残る。

遺跡の名前をどうつけたか

- ①オンドン「窪地」: 地形から
- ②アタウデス「棺」: 現代の墓地だったから
- ③ペンディエンテ「傾斜地」「保留」: 地形、それと迷い
- ④デサパレシード「消失」: 跡形もないから
- ⑤モンテグランデ 地名(すでに命名済み)
- ⑥ラス・ワカス: 地名(すでに命名済み)
- ⑦パンテオン「霊廟」:
とくに大型の墓が
並んでいるから
- ⑧メガリト(巨石): 大きな
石材が特徴的だから
- ⑨マルパッツ: 地名



岩絵

・実用性は？

口頭で伝承された情報とあわせて「道しるべ」と言うことはありうる。

繰り返し現れる図形は絵文字として情報を伝達したかもしれない。



文化資源・文化遺産

- ・町役場に文化財係を置いて、工事の届けを出させたら文化庁の支局は県ごとにあり、ワヌコ市にもある。役場との連携が取れていない状況が見て取れる。

- ・ラス・ワカスは移動できなかったのか？

大部分が土砂であり、構造上移動は難しい。ペルー全土に遺跡は膨大にあり、観光地でないものを救う選択肢はなかっただろう。

- ・遺跡の一つにすぎないコトシュの「交差した手」がシンボルとして市民に受け容れられているのは不思議

他に目立った遺跡がない。街に近い。分かりやすい。



- ・アンデス文明略史
- ・盗掘
- ・博物館：収蔵

研究

展示

地域社会

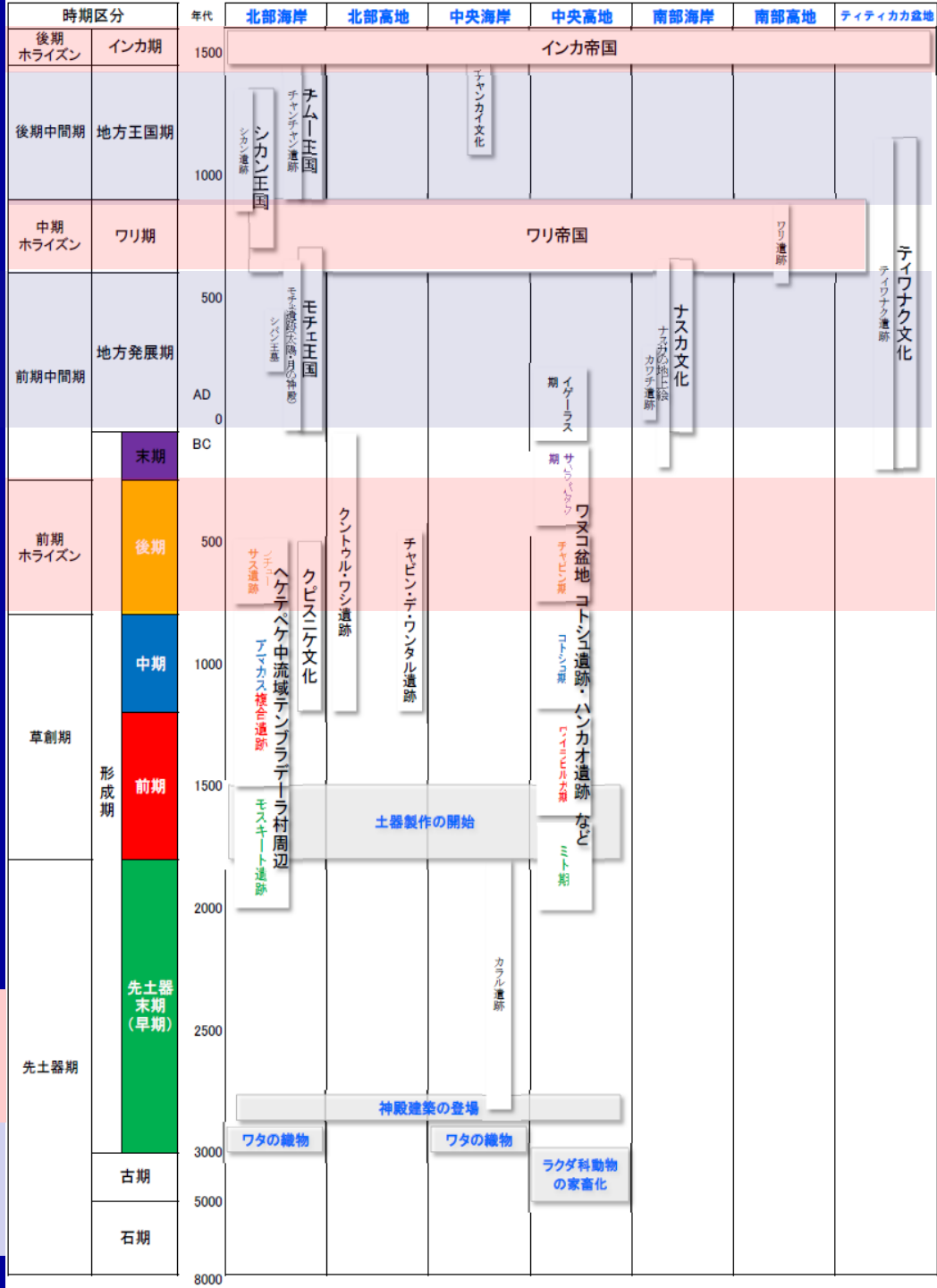
南米ペルーで考古学の研究を進める中で、文化資源・文化遺産としての考古資料をめぐるさまざまな課題に直面することとなった。



盗掘された南部海岸の遺跡

アンデス文明略史
インカ以前の社会は文字
による記録がないため、
工芸品が指標になる。

ホライズン
類似した工芸品が広く共有される
中間期
地域ごとに工芸品の特徴が異なる



後期ホライズン(インカ帝国期)

後期中間期

中期ホライズン(ワリ帝国期)

前期中間期

前期ホライズン(「チャビン文化」)

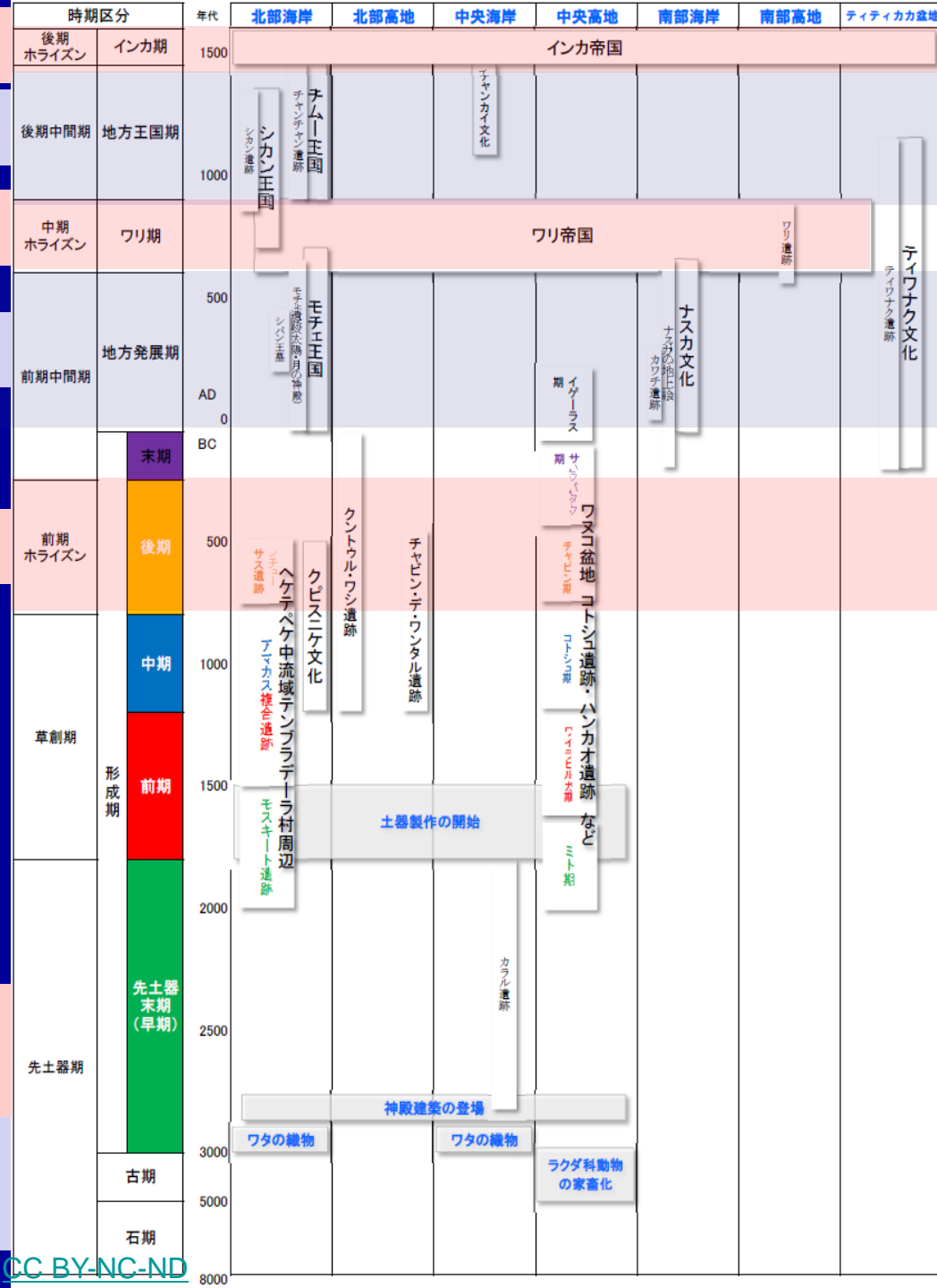
アンデス文明略史
インカ以前の社会は文字
による記録がないため、
工芸品が指標になる。

ホライズン(現象)

類似した工芸品が広く共有される

中間期

地域ごとに工芸品の特徴が異なる



後期ホライズン
インカ帝国期
マチュピチュ遺跡

「古代アンデス文明展」
国立科学博物館 TBS 朝日新聞



インカ帝国期



J. Ricardo Estabridis C. (ed.) 1994
Arte en el antiguo Perú.
Instituto nacional de cultura y Petroleos del Perú,
Lima, Perú



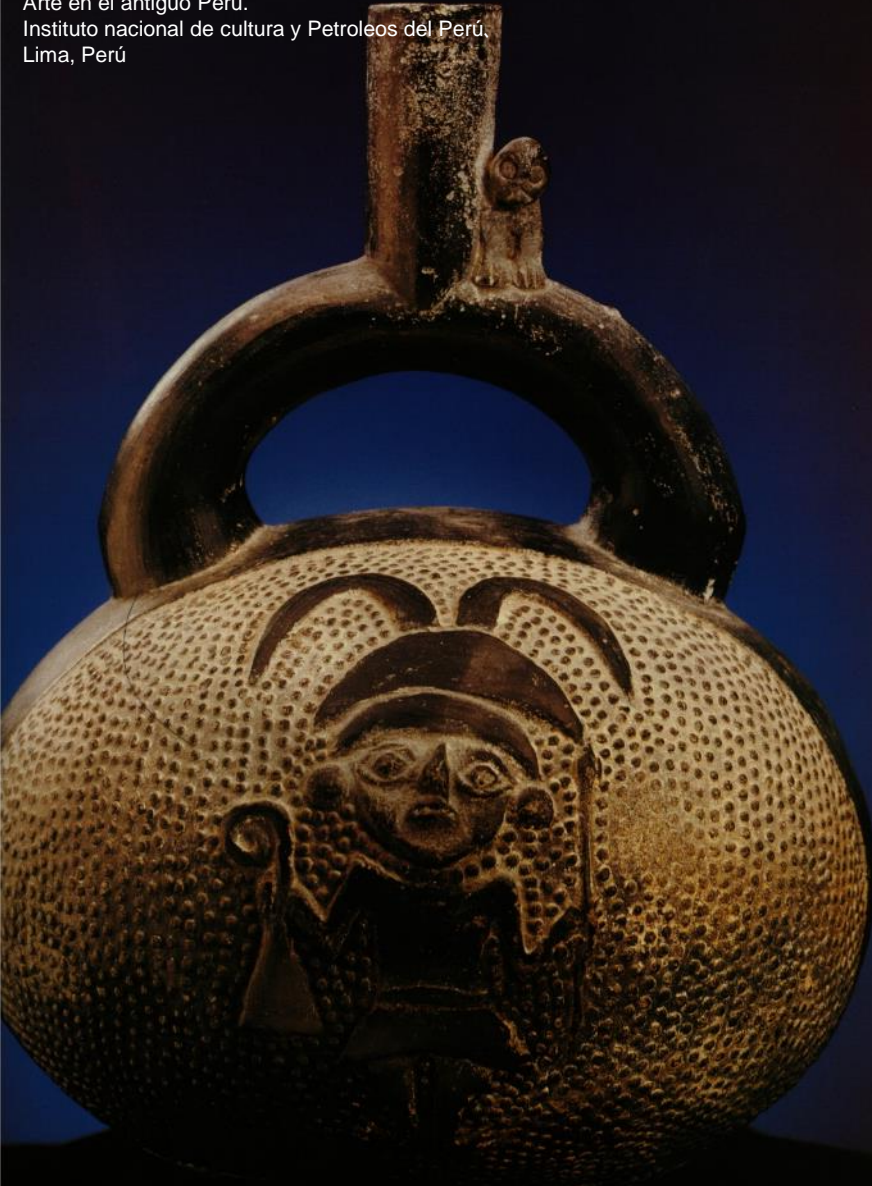
J. Ricardo Estabridis C. (ed.) 1994
Arte en el antiguo Perú.
Instituto nacional de cultura y Petroleos del Perú,
Lima, Perú

後期中間期(地方王国期) 北部海岸 チム一王国 (首都チャンチャン遺跡、世界遺産)



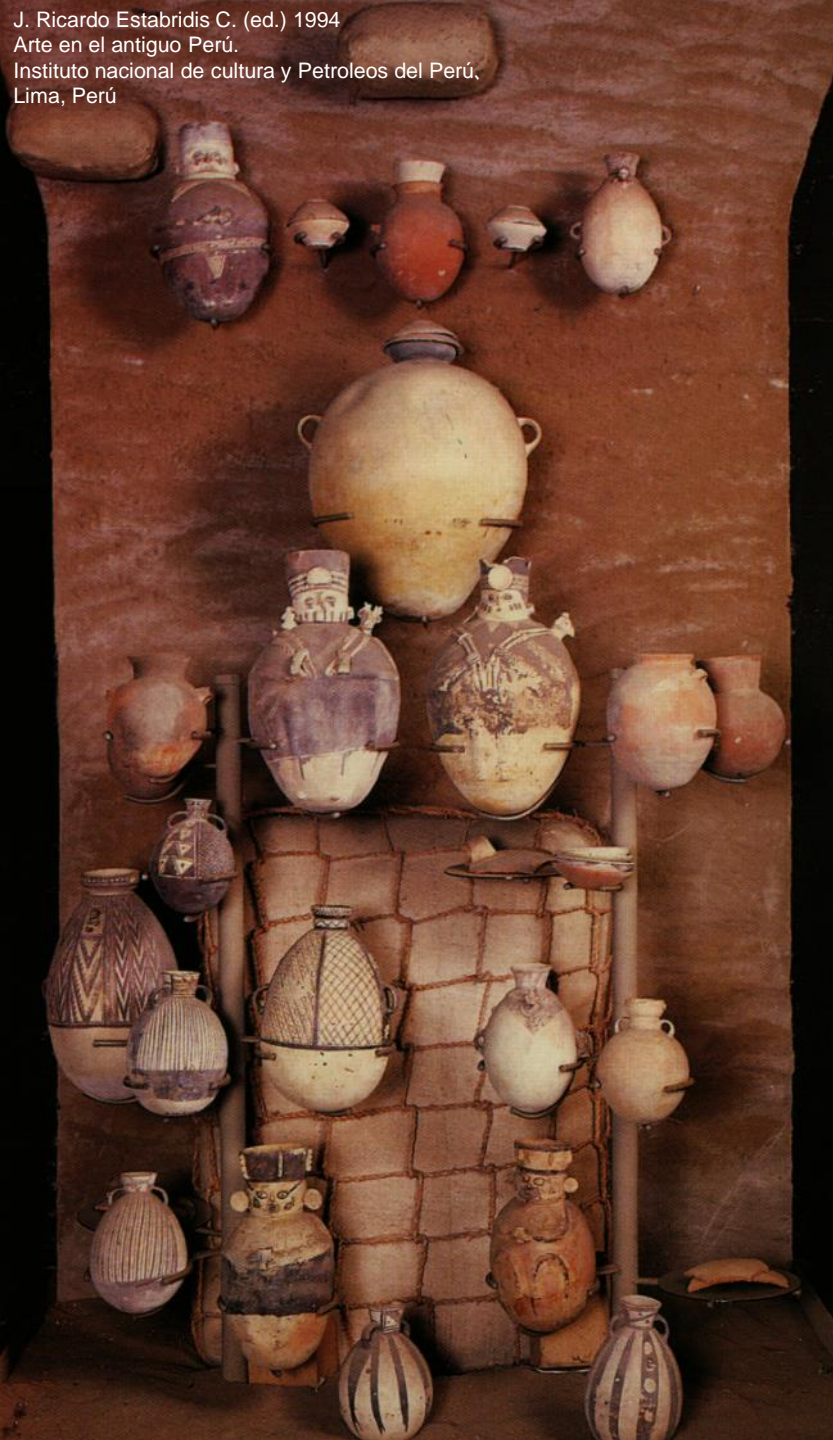
後期中間期(地方王国期) 北部海岸 チム一王国

J. Ricardo Estabridis C. (ed.) 1994
Arte en el antiguo Perú.
Instituto nacional de cultura y Petroleos del Perú.
Lima, Perú



J. Ricardo Estabridis C. (ed.) 1994
Arte en el antiguo Perú.
Instituto nacional de cultura y Petroleos del Perú.
Lima, Perú





後期中間期(地方王国期) 中央海岸 チャンカイ文化

※この画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する



後期中間期(地方王国期) 北部海岸北部 シカン王国 (中期シカン)

J. Ricardo Estabridis C. (ed.) 1994
Arte en el antiguo Perú.
Instituto nacional de cultura y Petroleos del Perú,
Lima, Perú



黄金の都シカンを掘る：古代アンデス / 島田泉著；小野雅弘構成
朝日新聞社1994年
カラー口絵



島田(1994)

中期ホライズン(ワリ帝国期)



J. Ricardo Estabridis C. (ed.) 1994
Arte en el antiguo Perú.
Instituto nacional de cultura y Petroleos del Perú,
Lima, Perú

ワリ帝国期 ワリ遺跡



ワリ帝国期 クスコ、ピキリヤクタ遺跡

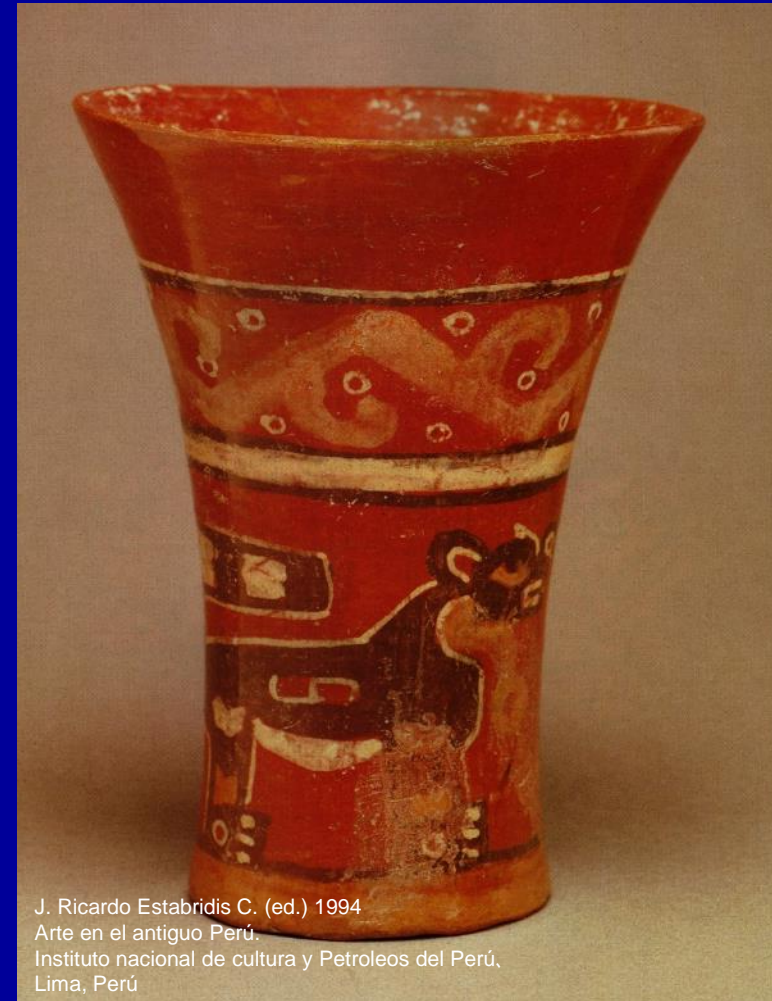


前期中間期(地方発展期)ボリビア ティワナク遺跡(世界遺産)



前期中間期(地方発展期) ボリビア、ティワナク遺跡

ペルー出土の ティワナク文化の土器



J. Ricardo Estabridis C. (ed.) 1994
Arte en el antiguo Perú.
Instituto nacional de cultura y Petroleos del Perú,
Lima, Perú

前期中間期(地方発展期)南部海岸 ナス力文化(地上絵)



前期中間期(地方発展期)南部海岸 ナスカ文化



神殿遺跡 カワチ

前期中間期(地方発展期) 南部海岸 ナスカ文化



前期中間期(地方発展期)北部海岸 モチエ王国 (月の神殿)



前期中間期(地方発展期)北部海岸 モチエ王国 (月の神殿)



前期中間期(地方発展期)北部海岸 モチェ王国



J. Ricardo Estabridis C. (ed.) 1994
Arte en el antiguo Perú.
Instituto nacional de cultura y Petroleos del Perú,
Lima, Perú



J. Ricardo Estabridis C. (ed.) 1994
Arte en el antiguo Perú.
Instituto nacional de cultura y Petroleos del Perú,
Lima, Perú

前期中間期(地方発展期)北部海岸 モチェ王国 シパン王墓



J. Ricardo Estabridis C. (ed.) 1994
Arte en el antiguo Perú.
Instituto nacional de cultura y Petroleos del Perú.
Lima, Perú

前期ホライズン(形成期後期)の土器



東京大学古代アンデス文明調査団編(1994)

東京大学古代アンデス文明調査団 編『文明の創造力 古代アンデスの造形美術』(1994年)

p41、54-56 鏡形壺(ジャガー、鳥)

1994年、東京大学総合研究資料館(現・博物館)
「文明の創造力 古代アンデスの造形美術」展

※この画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する

形成期中期の土器 「テンブラデーラ出土」

東京大学古代アンデス文明調査団 編『文明の創造力 古代アンデスの造形美術』(1994)
p33、人物象形壺

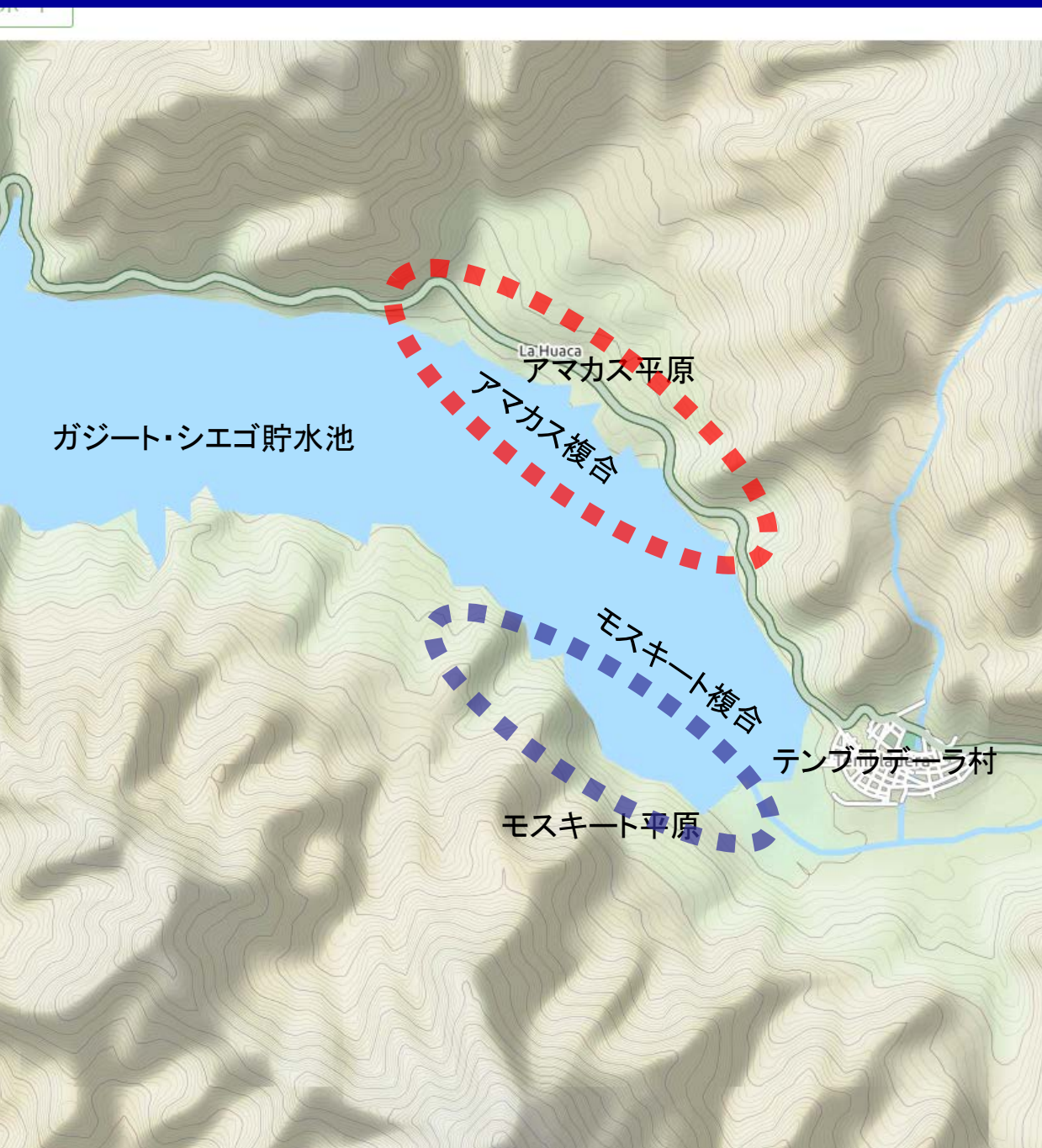


東京大学古代アンデス文明調査団 編『文明の創造力 古代アンデスの造形美術』(1994)
P30、象形壺(猿と蛇)



1994年、東京大学総合研究資料館(現・博物館)
「文明の創造力 古代アンデスの造形美術」展

※このページの画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する



テンブラデーラは
1960年代、形成
期の見事な土器
が多数盗掘され、
「テンブラデーラ様
式土器」という術
語ができた。

(c)OpenStreetMap contributors

考古学では、遺物がどこからどのように出土するか、詳細に記録することで情報を集める。

出所のわからないものは、厳密に言えば考古資料ではない。極端な話、よくできた贋作かもしれない。

しかしアンデス考古学に置いて参照されてきた品々は、必ずしも正式な発掘調査によって世に出たものばかりではない。

北部海岸 セロ・サパメ遺跡周辺

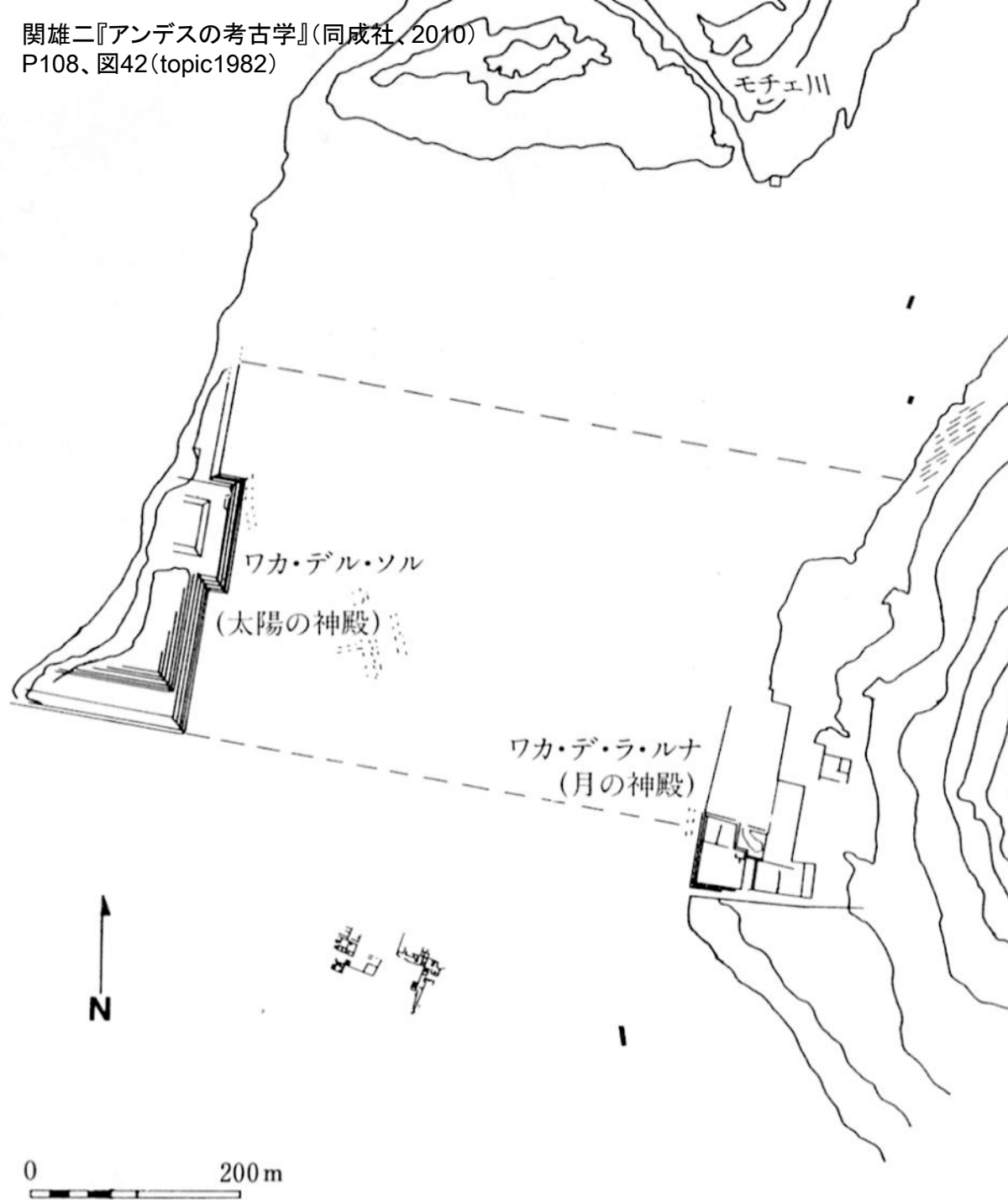
黄金の都シカンを掘る：古代アンデス / 島田泉著；小野雅弘構成
朝日新聞社1994年
カラー口絵32セロ・サパメ遺跡周辺。





モチエ遺跡 ワカ・デル・ソル(太陽の神殿)モチエ王国期





財宝探しのため
半分以上を破壊

アンデス文明は黄金
製品を特徴とするこ
ともあり、ペルーで
は古来より盗掘がさ
かんであった。

チongoヤペ遺跡 最古級の黄金製品



スペインから来た征服者
たちは、インカの貴金属
を略奪し、次に地中の貴
金属を探すようになった。

Lothrop 1941



Samuel K. Lothrop 1941 Gold Ornaments of Chavin Style from Chongoyape, Peru, American Antiquity 6 (2): 250-262.

<https://www.cambridge.org/core/journals/american-antiquity/article/gold-ornaments-of-chavin-style-from-chongoyape-peru/94CF25C296C3A46772983F0DBA30E09F>
Gold crowns from Chongoyape

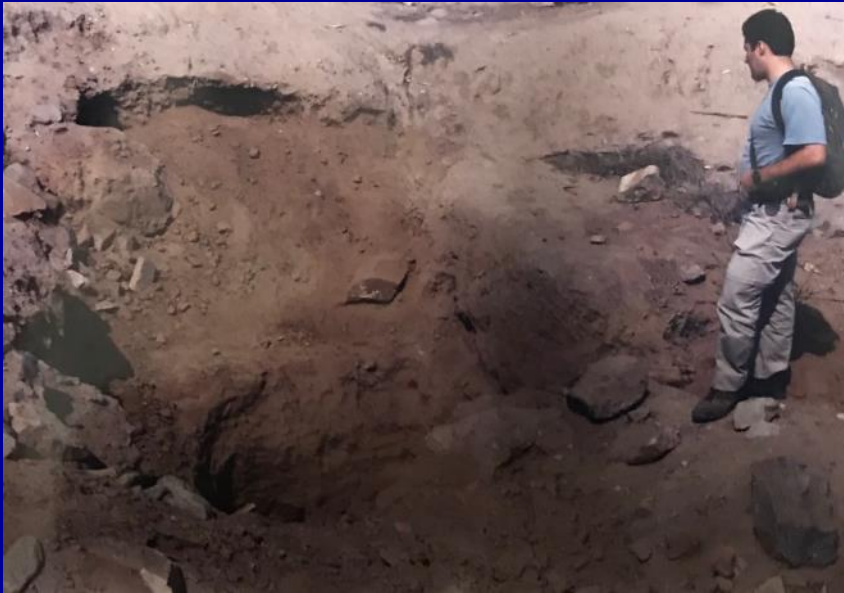
Single specimens from pair of gold ear spools, and a gold headband

* This figure cannot be reproduced, shared, altered, or exploited commercially in any way without the permission of Cambridge University Press, as it is copyrighted material and therefore not subject to the allowances permitted by a CC-BY licence.

盗掘

- ・監視が行き届いていない
- ・過去との連続性が意識されていない:
現代ペルー人にとって古代人は「異教徒」

経済的な利益を求めての盗掘はもちろん、カトリックの聖週間（復活祭直前の一週間）に盗掘にいそしむ習慣や、呪術のための呪具を求めるためなど、より象徴性の高い目的による盗掘もあり、一掃することは難しい。



しかし美術的価値の大きい品々を探す盗掘者は多く、それらこそ時代・地域の特徴を強く反映した資料でもある。出土コンテキスト不明だからといって、そういった品を切り捨てていたらアンデス文明の全容解明は期待できない。

北部山地、クントウル・ワシ遺跡

東京大学が1988-1998年に、それ以降埼玉大学が調査



東京大学によるクントウル・ワシ遺跡発掘 1988-2003年

「初めて盗掘者より先に考古学者が黄金を見つけた」



写真 クントウル・ワシ調査団



写真 義井豊

クントウル・ワシ遺跡の上



写真 クントウル・ワシ調査団

十四人面金冠



写真 クントウル・ワシ調査団

五面ジャガー金冠



写真 クントウル・ワシ調査団

双子ジャガー鼻飾り

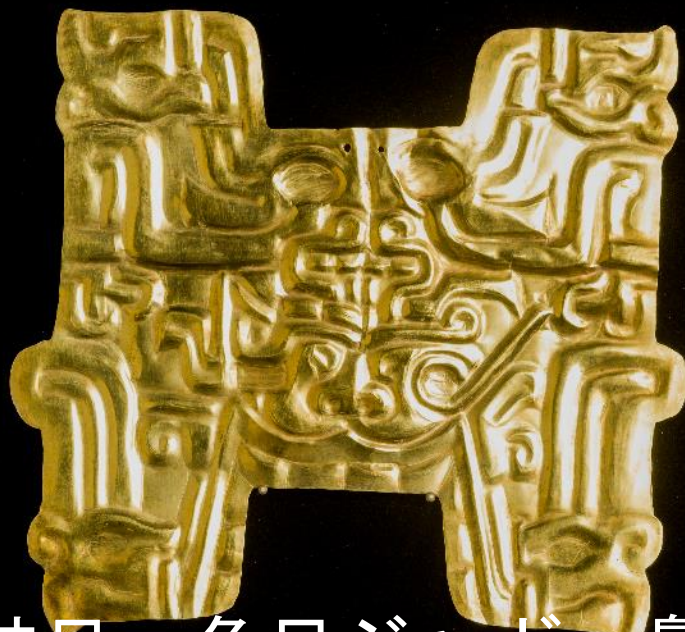


写真 クントウル・ワシ調査団

蛇目・角目ジャガー鼻飾り

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2017 鶴見英成

[CC BY-NC-ND](#)

金製耳輪





クントウル・ワシ博物館

黄金製品は首都リマで管理すべきものであったが、地元クントウル・ワシ村の人々は出土品を地元にとどめることを希望した。

しかしインフラや安全面が未整備な山村であるため困難な課題であった。

調査団は日本での展覧会を実現し、資金を集めて1994年にクントウル・ワシ博物館を設立した。

新たな黄金製品の出土

96年に3基、97年に1基の墓が、黄金を伴って出土。



蛇ジャガー耳飾り



修復保存・遺跡公園化



2003年、UNESCO/日本信託基金による保存修復

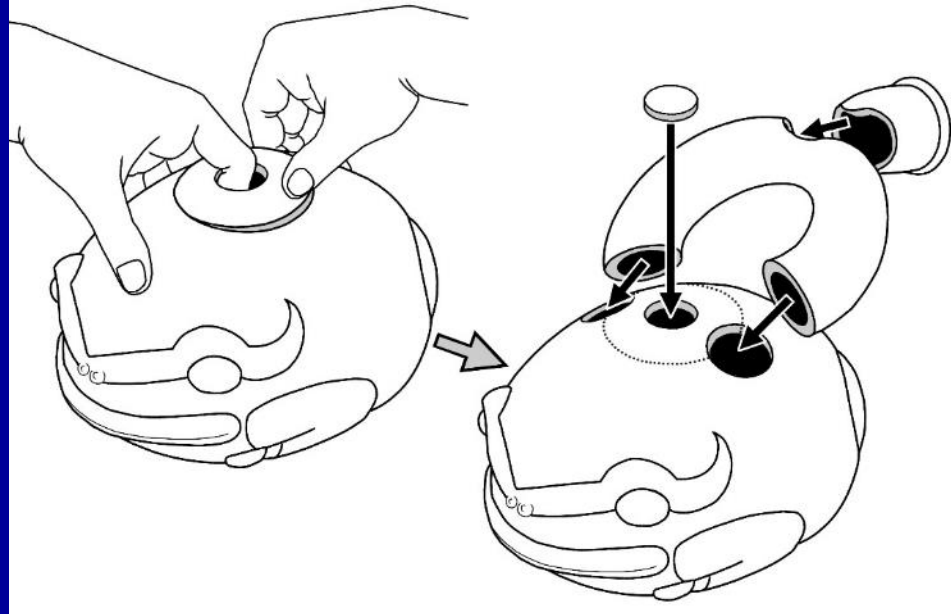
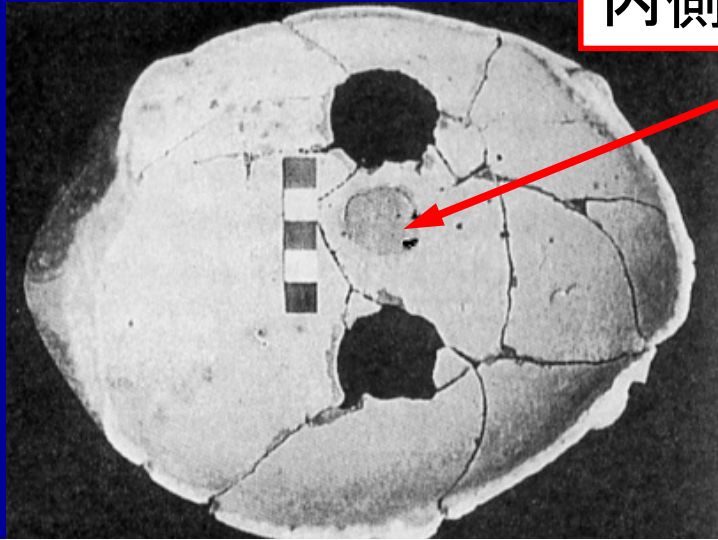
2013年、博物館にJICA青年海外協力隊員1名派遣

2014年 博物館20周年式典および展示リニューアル

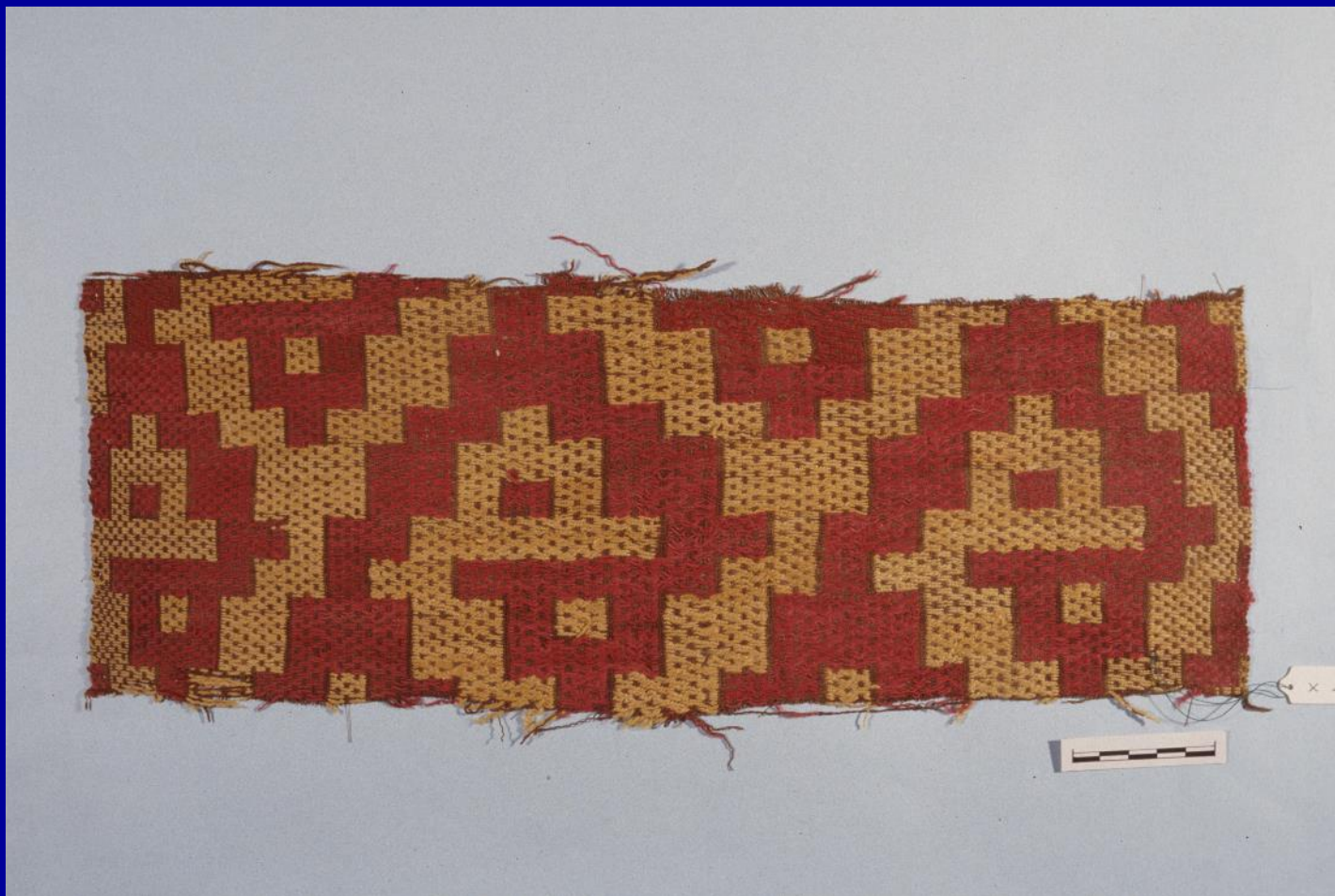


クントウル・ワシにおいて
土器の接合や
図化を担当。

完成後にはふさがれて
見えなくなる穴
内側からふさいである

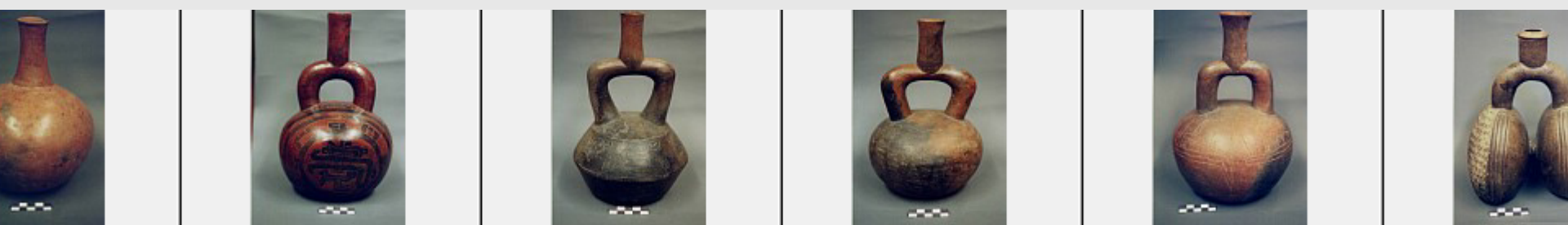
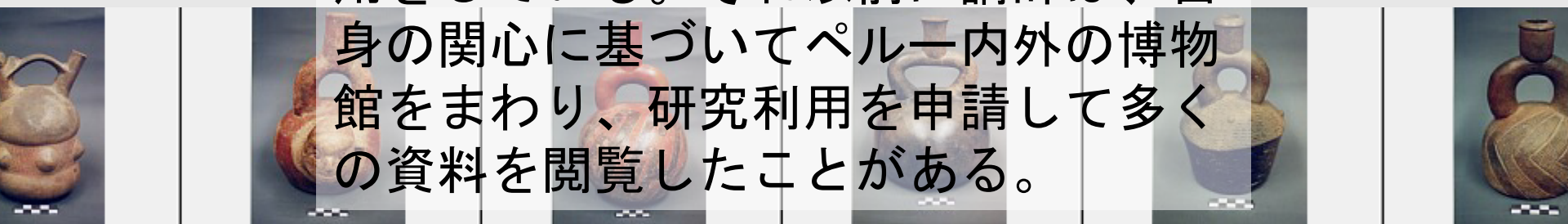


博物館は研究機関である。東京大学総合研究博物館においても、コレクションの織物を年代測定するなどの研究利用をしている。



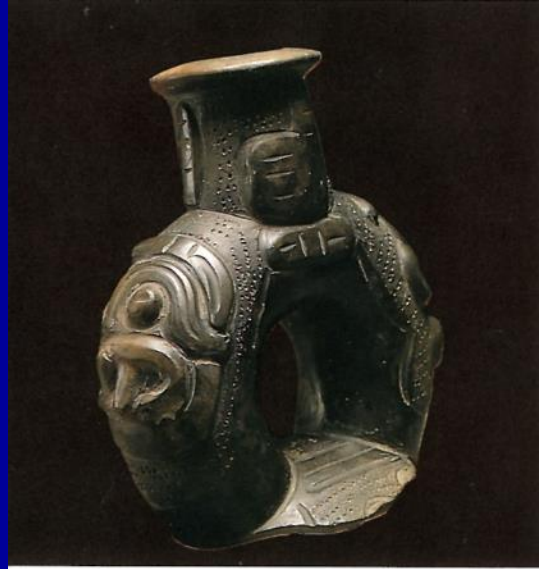
UMUT

※この画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する

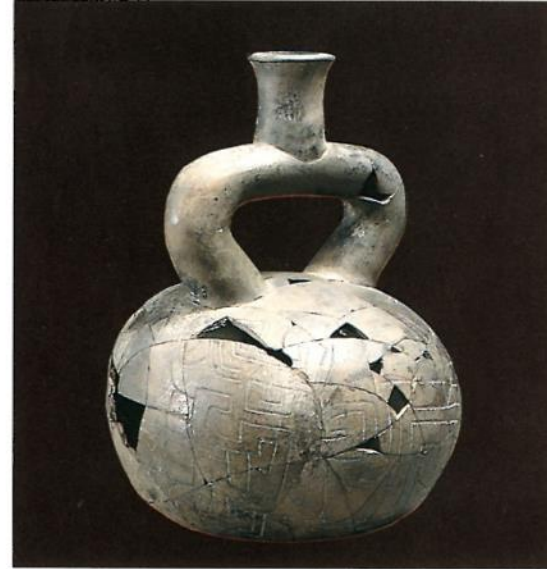


博物館は研究機関である。東京大学総合研究博物館においても、コレクションの織物を年代測定するなどの研究利用をしている。それ以前に講師は、自身の関心に基づいてペルー内外の博物館をまわり、研究利用を申請して多くの資料を閲覧したことがある。

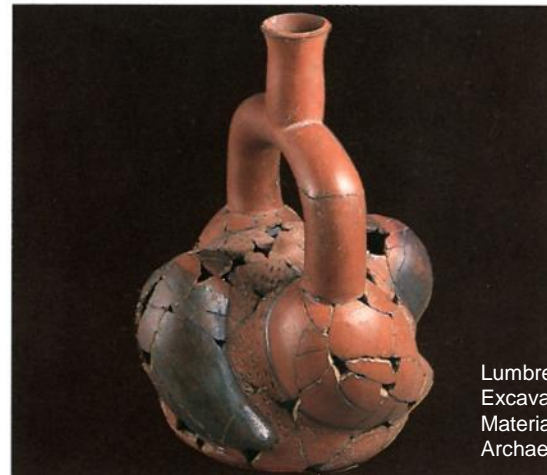
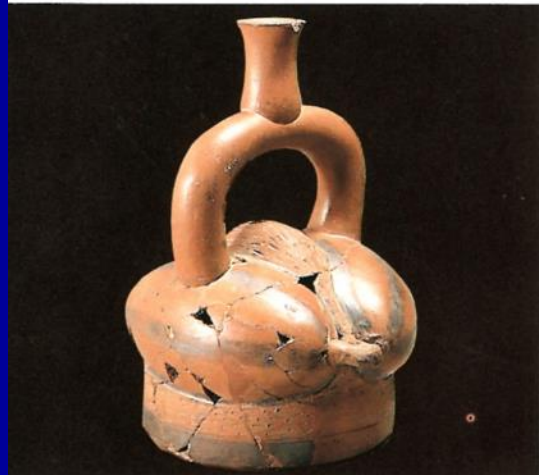
600kmほど離れた、ほぼ同時代のチャビン・デ・ワンタル遺跡



a



b



Lumbreyas, L. G. (1993), "Chavin de Huanter:
Excavaciones en la Galeria de las Ofrendas"
Materialien zur Allgemein und Vergleichenden
Archaeologie 51 Mainz am Rhein: P. von Zabern

適度に破損した発掘資料は観察しやすい。
割れ口のないようなもの(盗掘品)は中が見えない。

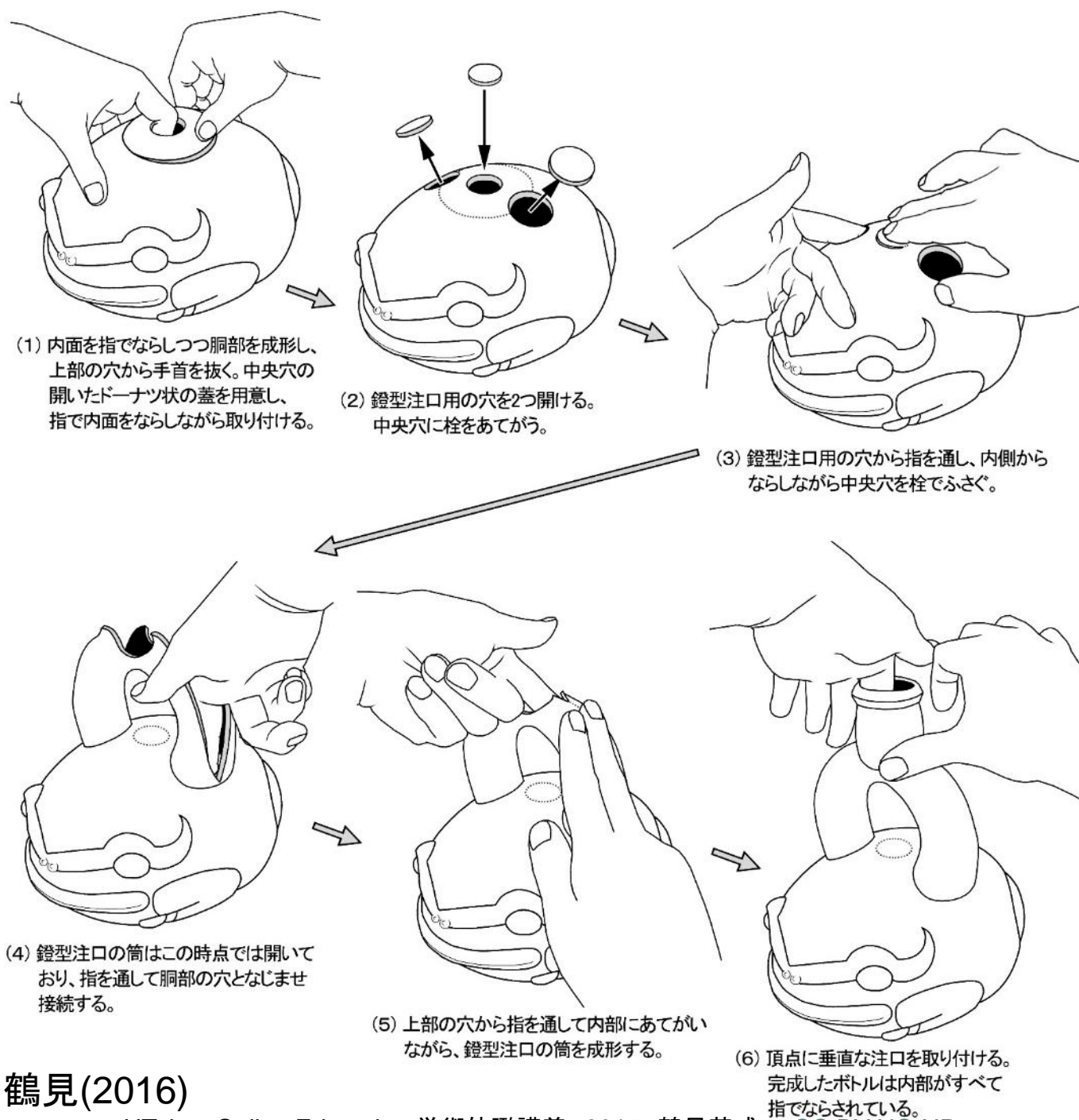


遠く離れた遺跡間で、作り方が同じなのか？



完成後に見えなくなる穴。
遠く離れた遺跡間で作り方が共有されているのは、
外見の見よう見まねではなく、マンツーマンで伝えた
ということ。

この時代、土器づくりを専門とする社会階層が現れた
のだろう。

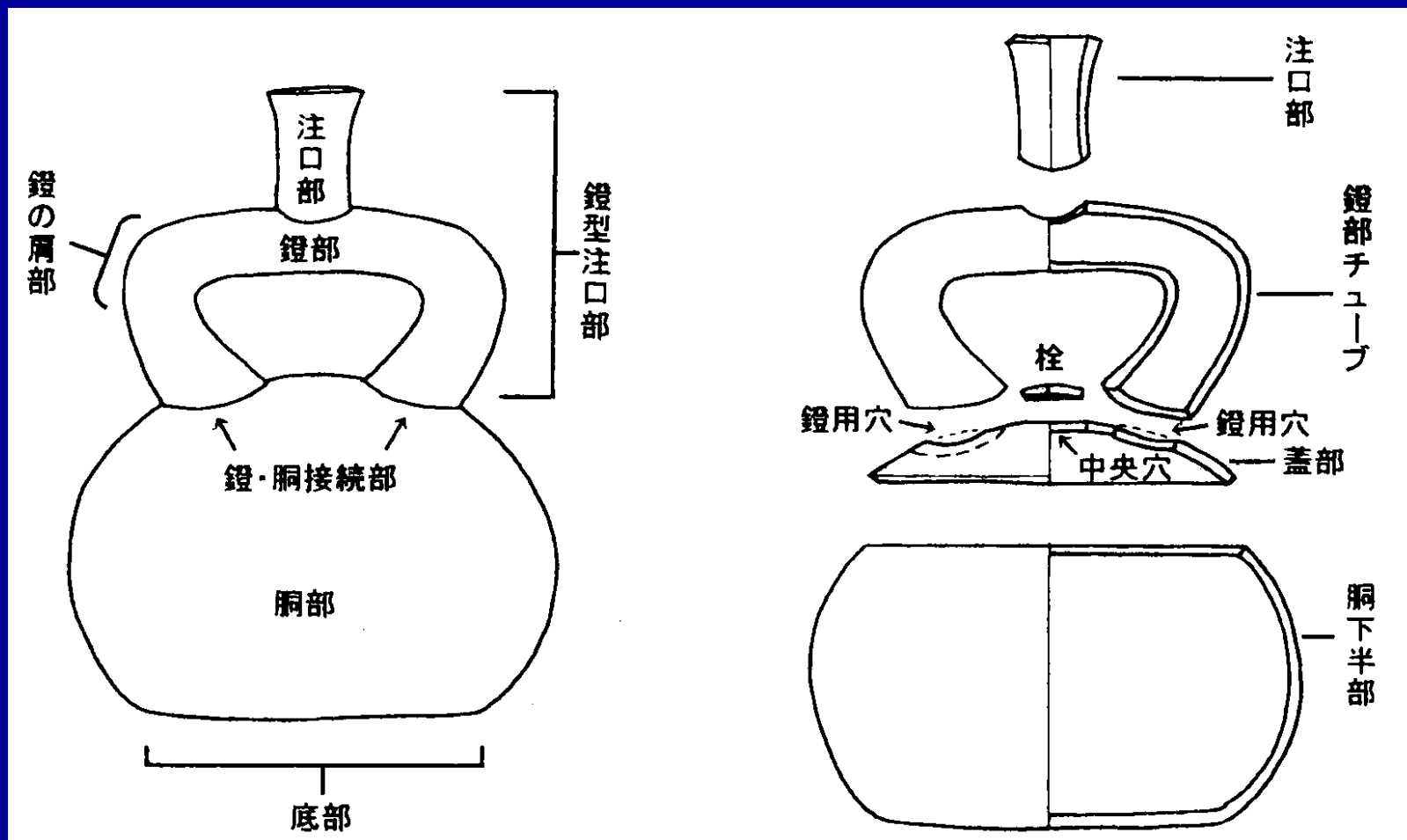


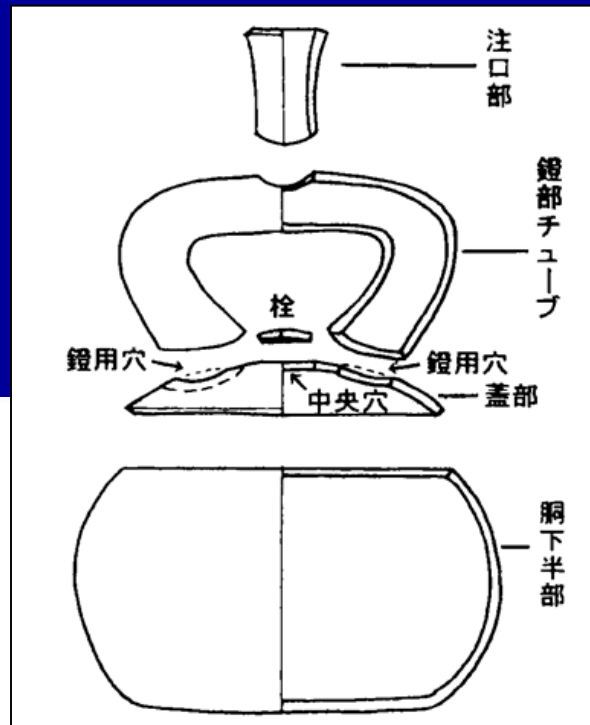
鶴見(2016)

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2017 鶴見英成

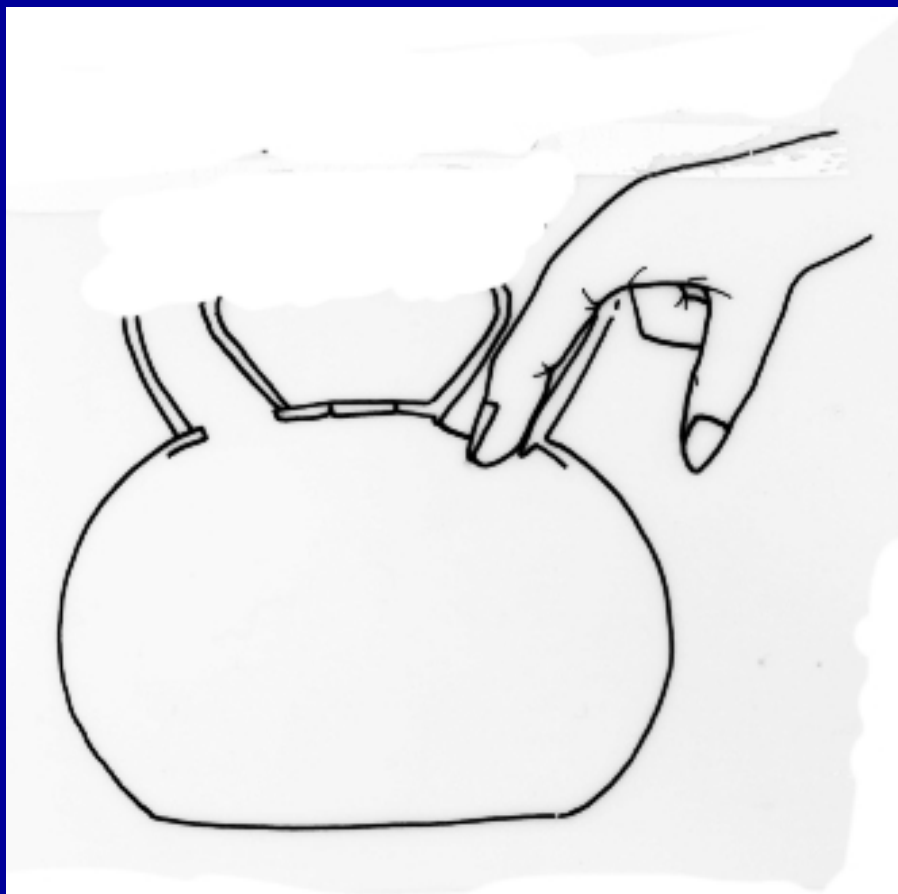
CC BY-NC-ND

どのような手順で組み合わせるか

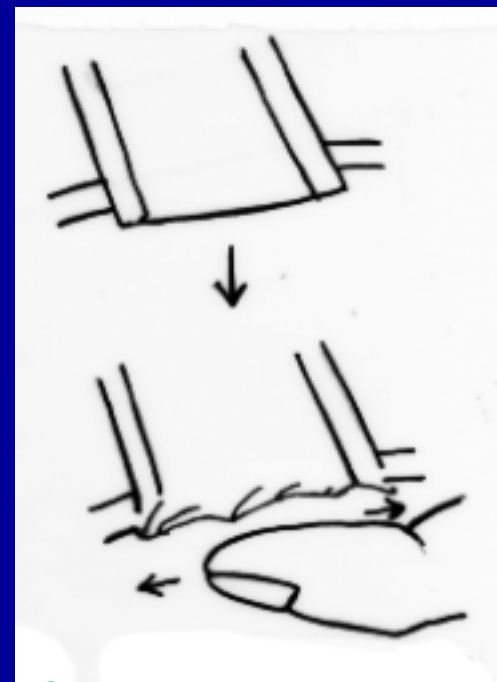
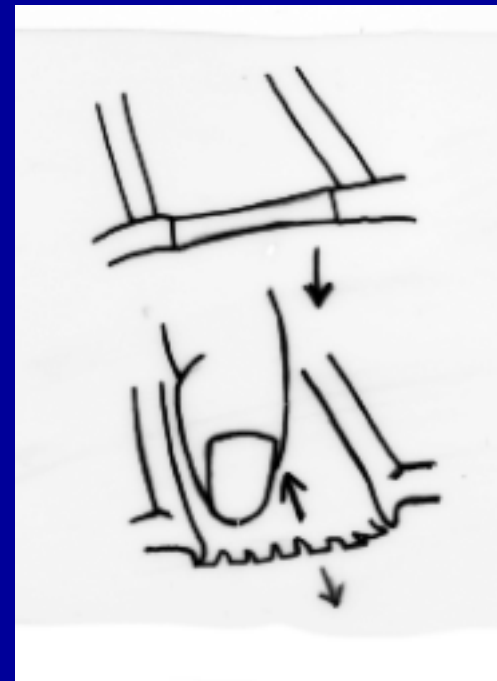


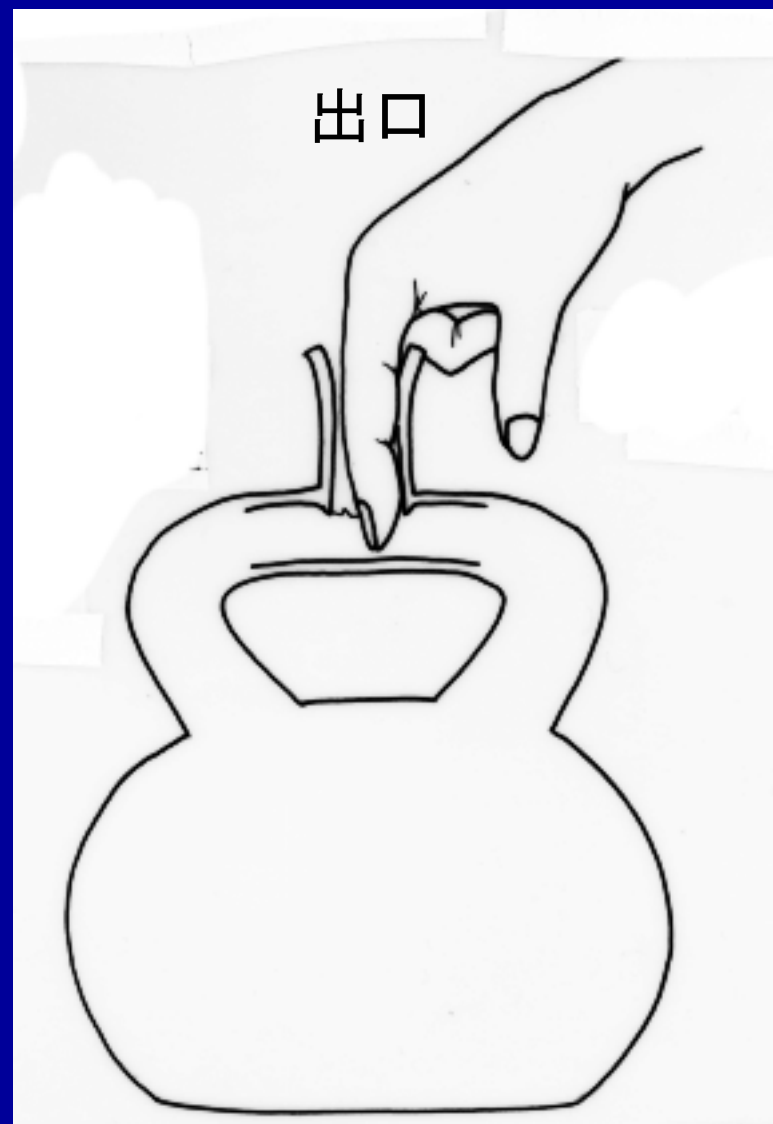
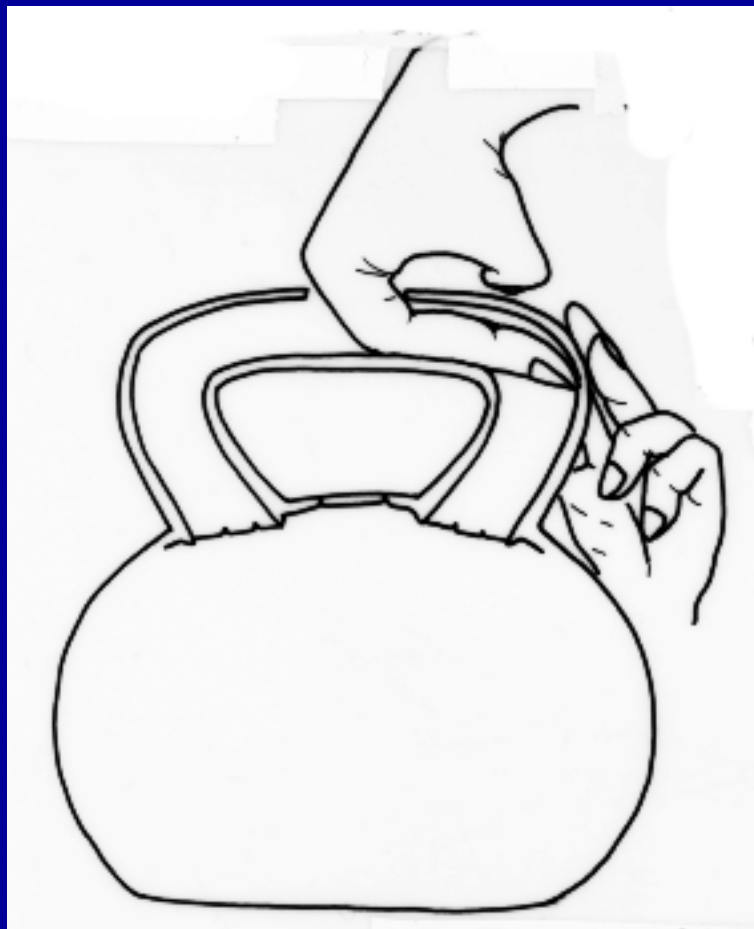


チューブにそって
馴らしている

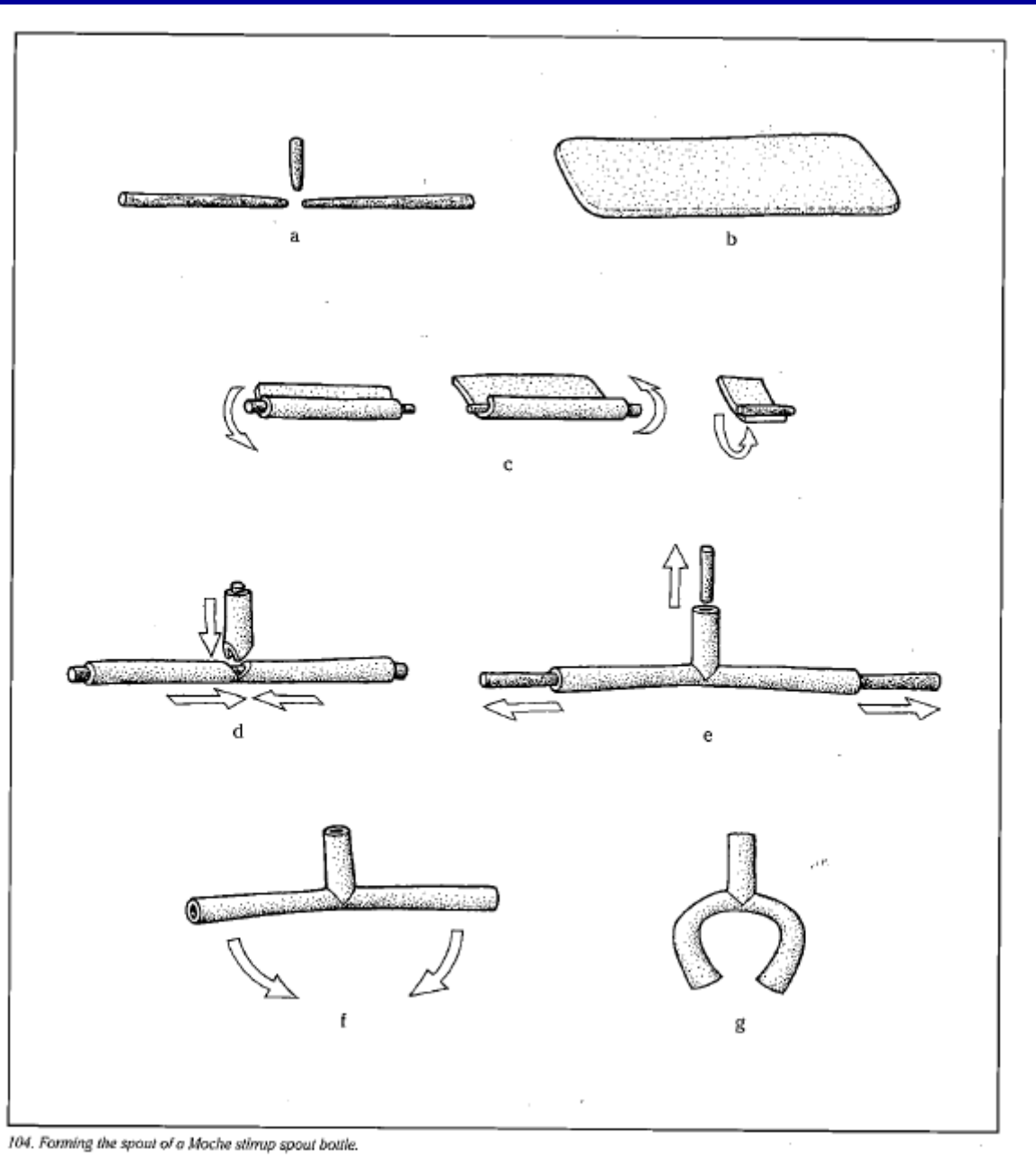


別の
研究者の
解釈

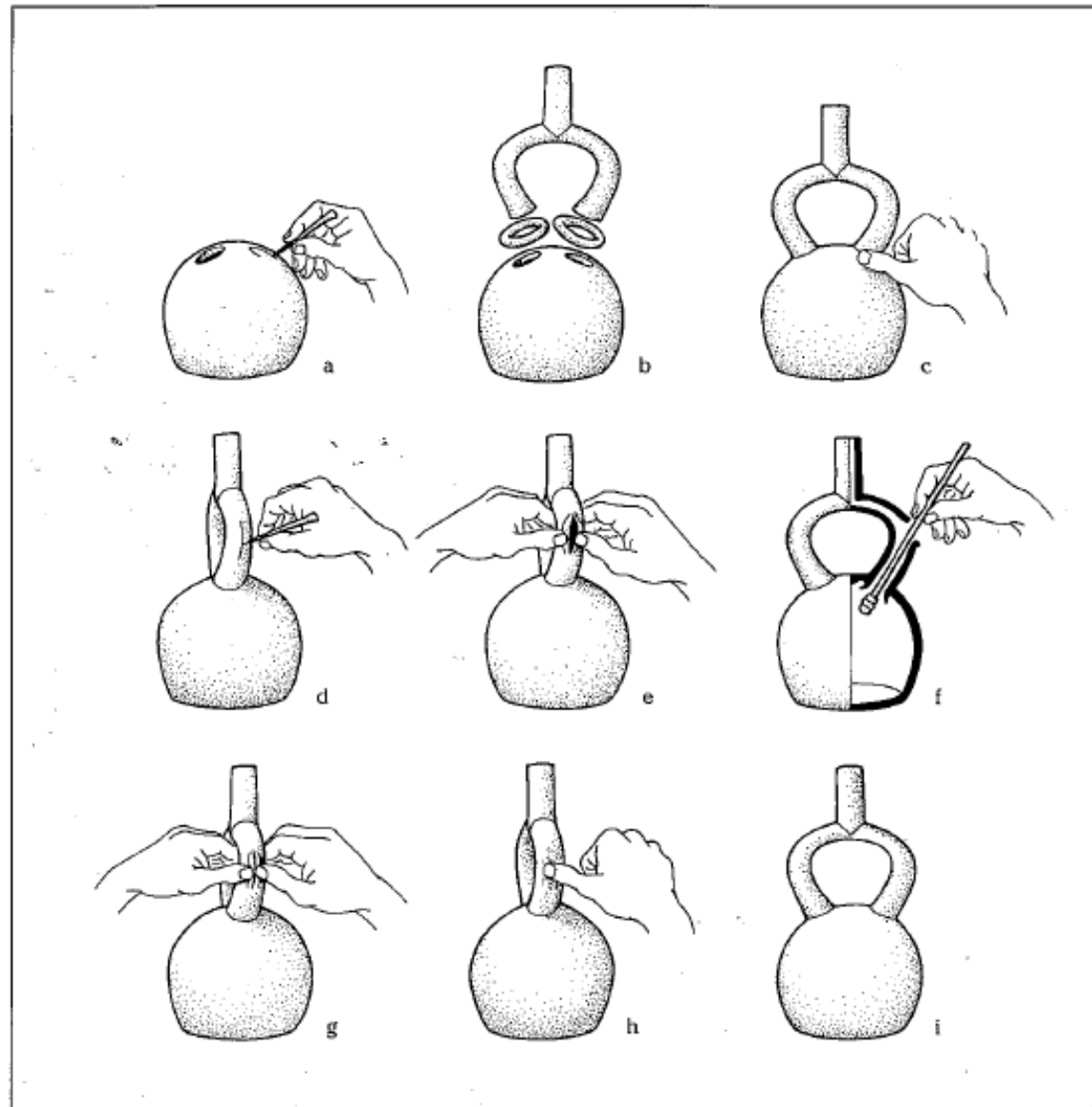




モチ王国の細い燈



モチェ王国期の序盤に 「中央穴」方式はすたれた



105. Joining the spout and chamber of a Moche stirrup spout bottle.

型(分割型)をつかうと、誰でもそれなりのものを作れる。



Ceramics of ancient Peru /
Christopher B. Donnan(1992)
P16 ,fig10

※この画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する



チムー王国では
鐙と胴それぞれが型

型の接合線をならし
最後に底の穴から指1本を抜く



UMUT



UMUT

形成期



クントウル・ワシ調査団

神殿での祭祀のための神聖な器として、熟練した職人が1点ずつ手間をかけて仕上げた

チム一王国期



UMUT

王が統治する大国家の時代には、1点ずつの完成度よりも均質で素早い大量生産が重視されるようになった

「ヘタになった」のではなく「社会が求めるものが変わった」ということ

※このページの画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する

ボトルをふさぐのはもったいない。
土器の内面の情報が文明史研究において重要であるという上記の成果をふまえ、土器の接合・展示の方法を工夫してきた。





自分の発掘資料



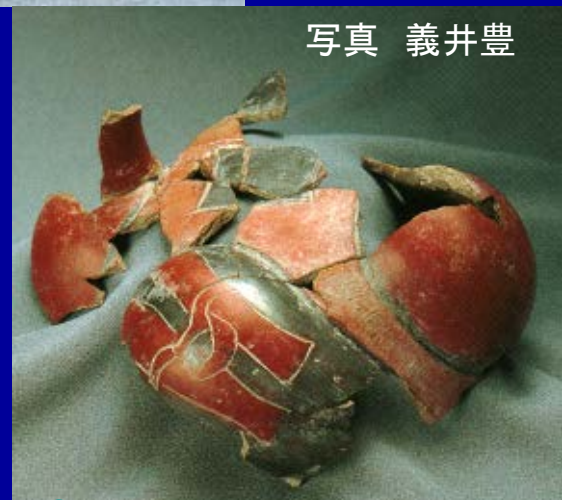
底部がなく自立せず、
本来の形がわかり
にくい土器



写真 義井豊



写真 義井豊







研究の視点を展示デザインに活かしていく

クントウル・ワシ村においては、博物館の創設が呼び水となり、水道、電気、派出所などの設備が整えられるなどして、村人たちの紐帯を強める役割を果たしている。博物館の運営に関して日本調査団は相談役にとどまり、実務は村人たちの組織が進めている。



2014年 クントウル・ワシ博物館 20周年リニューアルオープン

コトシュ遺跡「交差した手」



レプリカ
2012



レプリカ
1960



型





クントウル・ワシ博物館は開館から20年以上が過ぎたが、発掘や博物館運営に関わってきた村人たちの「土地に根ざした主観的歴史観や記憶」をひとつの拠り所として運営は続いている。



「蛇のレリーフ」
1997年発見、保存
のために埋め戻さ
れている。
村人であっても、当
時の作業員以外は
写真でしか知らない。



上半分のみ
東京で完成



空輸



地元の家具職人



台座





Altorrelieve de Serpiente
Fase Copa

藤井龍彦・国立民族学博物館名誉教授による2007年～09年の調査



記念硬貨

- ・コトシュ遺跡に関して、高齢者を主としたワヌコ市民から聞き取り調査、小学生にアンケート調査。

コトシュ遺跡は知っていても、学術的な知識は浸透していない。

- ・交差した手をめぐる混乱した言説の流布

「手は金でできていた」

「手は日本に行ってしまった」

ワヌコ大学附属博物館



ワヌコ県旗と 日本国旗



当時のメンバー
大貫良夫東京大学
名誉教授の講演





除幕式はたいへん盛況であつたが、その後の経過を見る限り、

- ・休館が多い
- ・広報がさかんでない
- ・地元の人はいかない



コトシュ遺跡の 附属博物館



コトシュ遺跡は公園化され、
観光客は多数訪れる。

地元ワヌコ市の観光ガイドは
情報を求めて必ず展示をチェ
ックするだろう。

観光ガイド向け講習会



成果発表報告会



遺跡博物館に写真パネル展示



現地説明会



Tokio, hoy. Archivo de las películas fotográficas de proyectos arqueológicos en los Andes desde 1958



Memorias Huanuqueñas en Tokio



1966. Trabajadores huanuqueños amarrando cajas de cartón de la Universidad de Tokio

MOBILE MUSEUM (MUSEO MÓVIL) "Memorias Huanuqueñas en Tokio" fue expuesta por el Museo Universitario de la Universidad de Tokio, Japón, en 24 de septiembre de 2016.



Museo Universitario de la Universidad de Tokio exhibe a través del MUSEO MÓVIL su archivo de fotos y documentos de las excavaciones por la Misión japonesa en Kotosh: memorias de gente, paisaje y eventos en Huánuco de medio siglo atrás.

1960. El director del proyecto Dr. Seichí Izumi (izquierda; 1915-1970) y el dibujante arqueológico Sr. Pedro Rojas Ponce (2do a la derecha; 1913-2008)



1963. Excavación de las Manos Cruzadas de "Mujer" por el Dr. Toshihiko Sono (1923-1968), el jefe del campo



1960. Jóvenes huanuqueños escuchando radio en Kotosh

モバイルミュージアム ワヌコの記憶 @東京

東京大学総合研究博物館が補完する1960年代の写真フィルム

東大の段ボール箱を組み立てる
1966年の作業員たち

写真 東京大学アンデス調査団

※この画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する

La primera expedición



1960



Gran almuerzo en campamento



Danzantes de Negritos en Vichaycoto

La mitad oeste del Templo de las Manos Cruzadas fue descubierto. “(Manos de) Hombre”, la primera pieza de relieve que adornaba su pared, fue reportada a nivel nacional. Después de la excavación el templo fue tapado, pero “Hombre” volvió a ser desenterrado por visitantes curiosos y fue destruido por alguien.



写真 東京大学アンデス調査団

地元の人たちとの和やかな会食

「男の手」が発見されたが、埋め戻しのあとに何者かが壊してしまった



Sr. Maximiliano



Sr. Obispo
Arce
Sr. Luis
Roldán



Sr. Vargas
Sr. Vargas
Sr. Vargas



Ceremonia de tapado de los pozos de excavaciones y exposición de materiales encontrados



Pago de sueldo



Dr. Seichi Izumi curando herida de un niño

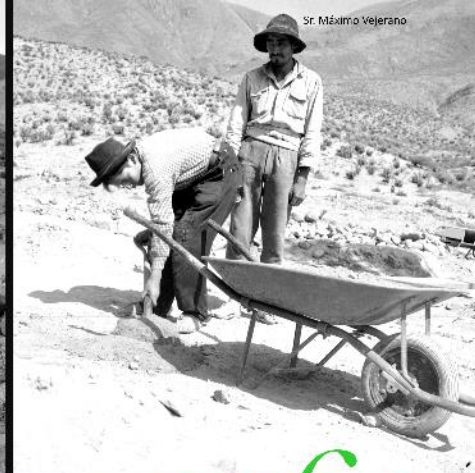


市の有力者らを招いての現地展示会と埋め戻しの式典

子供の怪我を手当てる泉教授

※この画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する

MUSEO MÓVIL
Memorias
Huanuqueñas
en Tokio



MUSEO MÓVIL
Memorias
Huanuqueñas
en Tokio



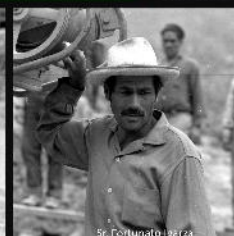
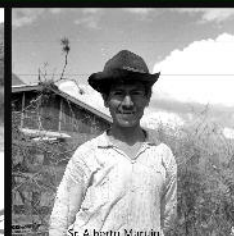
1963

La segunda
expedición

La pérdida de “Manos de Hombre” es la razón por la que el gobierno nacional del Perú mandó a la Misión Japonesa que extrajera la segunda pieza “Manos de Mujer” hallada en 1963, para su protección. El relieve fue cortado de la pared, pero los ciudadanos no permitieron llevarlo fuera de Huánuco. Izumi propuso una solución: El Colegio Nacional Leoncio Prado lo guardaría hasta que volviera la Misión en 1966 para restaurarlo. Así fue como se acordó.



1963年、政府の指示により壁から切り取った「女の手」は、いったん地元の高校で保管し、継ぎ合わせたのちに調査団から市に引き渡される取り決めとなった。





La tercera expedición 1966

La Misión Japonesa restauró el relieve de “Manos de Mujer” y lo entregó a la ciudad de Huánuco. En la plaza de armas celebraron una ceremonia en un ambiente amigable.



Fotos ofrecidas por Sra. Lizette López de García

En la década de 1980 una orden salió del despacho del director del Museo Nacional de Arqueología, Antropología e Historia Peruana, donde el relieve original de la “Mujer” se exhibe hasta hoy, decidiéndose trasladarlo de Huánuco a Lima. Así desaparecieron ambas piezas de las Manos Cruzadas de Huánuco.

1966年、壁から切り取った「女の手」を調査団から市へ引き渡した式典



MUSEO MÓVIL
Memorias
Huanuqueñas
en Tokio

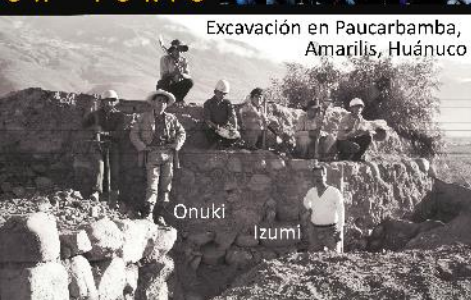


Danza de Negritos en la plaza de armas

Descubrimiento del Templo Blanco, el templo más antiguo –por el momento– en Kotosh. Sus paredes y pisos presentan enlucido blanco. Un relieve de forma amorfa fue moldeado con yeso.



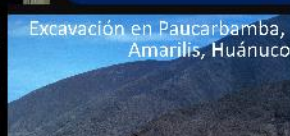
60年代に発掘し今日では都市化で破壊されてしまった遺跡を紹介



Excavación en Paucarbamba, Amarilis, Huánuco



Paucarbamba de hoy



Excavación en Paucarbamba, Amarilis, Huánuco



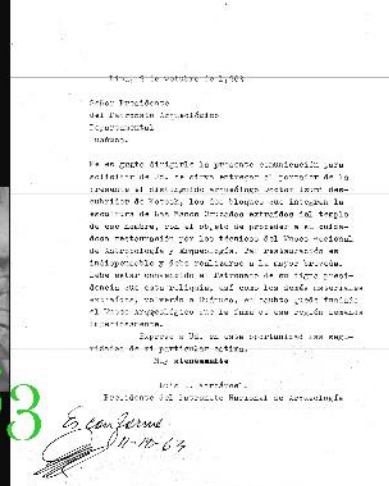
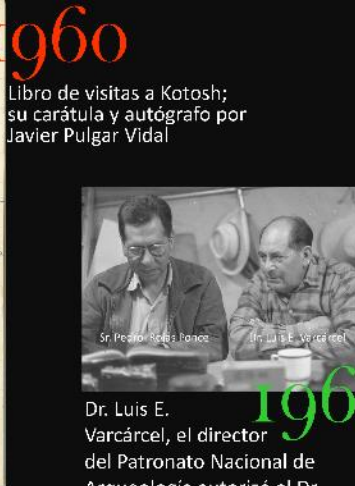
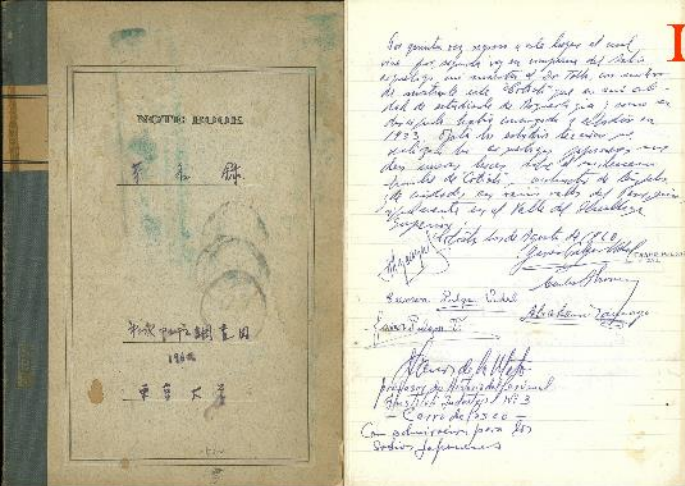
Shillacoto de hoy



Excavación en Shillacoto, Ciudad de Huánuco

En 1966 durante las investigaciones en Kotosh la Misión Japonesa excavó a pequeña escala otros sitios arqueológicos de la cuenca de Alto Huallaga.

※この画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する



発掘を訪れた人々のコメントを残した芳名録

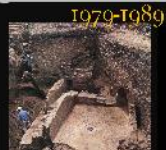
「女の手」を壁から切り取り、リマに運ぶよう指示した政府の文書

MUSEO MÓVIL
Memorias
Huanuqueñas
en Tokio



1968 Falleció Dr. Toshihiko Sono

1970 Falleció Dr. Seiichi Izumi



Huacaloma, Cajamarca



"Corona de 14 Caras" Kuntur Wasi, Cajamarca



Los materiales hallados en Shillacoto y las réplicas de las Manos Cruzadas se exhiben en el Museo Regional Leoncio Prado de UNHEVAL, ciudad de Huánuco.

コトシュのあと日本の考古学者は他の地域で調査をしていた

交差した手レプリカの展示

50年ぶりの再調査

写真 東京大学アンデス調査団
クントゥル・ワシ調査団

※この画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する

Después de la pérdida del Dr. Izumi, la Misión Japonesa comenzó estudios en los departamentos de Ancash, y posteriormente en Cajamarca, bajo dirección del Dr. Kazuo Terada. Después de su defunción en 1989 el Dr. Yoshio Onuki se hizo director de la Misión.

En el siglo XXI jóvenes arqueólogos japoneses comenzaron trasladarse a varias regiones del Perú. El grupo dirigido por el Mag. Kinya Inokuchi realizó un reconocimiento arqueológico (2001) y excavaciones (2002) en Huánuco.



2002



2013

El 50 aniversario de la última excavación del 1966, Dr. Eisei Tsurumi (Universidad de Tokio) y Lic. César Sara Repetto (PUCP, arqueólogo huanuqueño) iniciaron nueva etapa de excavaciones en Kotosh.

東京大学総合研究博物館

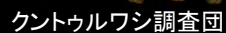


クントウルワシ調査団



特別展「最古の石器とハンドアックス——デザインの始まり」会期の2018年
1/28までは基本的に月曜休館、常設展のみのときは土日休館





「古代アンデス文明展」

国立科学博物館 TBS 朝日新聞

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2017 鶴見英成



ナスカ、ティワナク、そしてインカ帝国へ



古代 アンデス文明展

2017.10.21 SAT → 2018.2.18 SUN 国立科学博物館

開館時間：9時～17時（金曜日・土曜日は20時まで） ※入館は各閉館時刻の30分前まで。
休館日：毎週月曜日（1月8日（月）、2月12日（月）は開館）、12月28日（木）～1月1日（月）、1月9日（火）

国立科学博物館
東京・上野公園

公式サイト: http://andes2017-2019.main.jp/andes_web/ 公式Twitter-Instagram @andes2017_2019 お問い合わせ: TEL 03-5777-8600
(ハローダイヤル) FAX 03-5814-9098 主催: 国立科学博物館、TBS、朝日新聞社 共催: BS-TBS 後援: 文部科学省、外務省、ヘルム大使館
ポリア大使館、TBSラジオ 協賛: 三井物産、こたて印刷 協力: NTTドコモ、コントロール・ワシントン、国立民族学博物館、東京大学総合研究博物館

国立科学博物館 TBS 朝日新聞

CC BY-NC-ND

MUMMY



「チリバヤ文化のミイラとその副葬品(複製品)」ペルー文化省・ミイラ研究所・チリバヤ博物館所蔵

TIWANAKU



ティワナカ遺跡(ボリビア)

UYUNI SALT LAKE



ウユニ塩湖(ボリビア)

神と人がおりなす 聖なる時空

南米大陸の太平洋岸に展開した、時間的にも空間的にもあまりに巨大で複雑な文明の全体像を、私たちはまだほとんど知りません。時間的には先史時代から16世紀にスペイン人がインカ帝国を滅ぼすまでの約15000年間、空間的には南北4000km、標高差4500mに及ぶ広大な地域で、ナスカ、モチェ、ティワナクなど多種多様な文化が盛衰を繰り返しました。これらの文化の魅力と個性を紹介してきたのが、1994年に国立科学博物館で開催した「黄金の都 シカン発掘展」にはじまり、2012年「インカ帝国展—マチュピチュ『発見』100年」まで5回の展示会を開催、400万人以上を動員した「TBS アンデス・プロジェクト」です。その集大成といえる今回の特別展「古代アンデス文明展」では、いくつもの文化が連なり、影響を与え合う中で育まれた神々の神話や儀礼、神殿やピラミッドをつくり上げる優れた技術、厳しくも多彩な自然環境に適応した独自の生活様式などを、アンデス文明を代表する9つの文化と選び抜かれた約200点の貴重な資料によって明らかにします。

カルル文化

(紀元前3000年頃から前2000年頃)



「青年像」カルル遺跡博物館所蔵——カルルはペルー中部海岸スーベ谷で漁労を中心に繁栄した遺跡。土器が使われる以前(先土器文化)の巨大神殿遺跡で、この土偶も土をこねているだけで焼成していない。

チャビン文化

(紀元前1300年頃から前500年頃)



「差し込み用の突起付きの石の頭」ペルー文化省・国立チャビン博物館所蔵——チャビン・デ・ワンタル神殿の壁に差し込まれていた石の頭像。神への変身の過程を描いている。

ナスカ文化

(紀元前200年頃から紀元650年頃)



「リヤマが描かれた土器」ティダクティコアントニーニ博物館所蔵——地上絵で有名なナスカだが、土器にもすぐれて芸術的なものが多い。遠くに抽象化されているこの土器の絵もその一つ。

モチェ文化

(紀元200年頃から750/800年頃)



「黄金製の神像」ペルー文化省・国立博物館所蔵——モチェ文化はペルー北海岸で繁栄したユニークな土器と華麗な黄金製品で有名な文化。牙が生えているのはアンデス文明の神の特徴の一つ。

ティワナク文化

(紀元500年頃から1100年頃)



「トルコ石の象眼された黄金の頭飾り」先コロンプス期黄金博物館/ボリベアララ市所蔵——ペルー北海岸は黄金製品が潤沢なことで有名だったが、山の中の文化ティワナクにもこのような黄金製品があった。黄金は腐食しないため「永遠の生命」の象徴であった。

ワリ文化

(紀元650年頃から1000年頃)



「リヤマをかたどった土器」ペルー文化省・国立考古学人類学歴史博物館所蔵——ラクダ科のリヤマは運搬・織物のための羊毛・食肉などの用途でアンデスには欠かせない家畜だ。この香炉の高さは約70cmもある大きなもの。

シカン文化

(紀元800年頃から1375年頃)



「金の合金製のシカン神の仮面」ペルー文化省・国立シカン博物館所蔵——アンデスの多神教の風土の中で、シカンではこの仮面のような「アーモンド・アイ」をした「一神教的な」神が頻出する。

チムー文化

(紀元1100年頃から1470年頃)



「儀式用人物像カップ」リマ美術館所蔵——ペルー北海岸でシカンの後継国家として繁栄したチムーは、15世紀にインカ帝国とアンデスの支配権を最終的に争った強大な王国。これは細かな装飾を施した儀式用のカップ。

インカ帝国

(紀元15世紀早期から1572年頃)



「キープ」ペルー文化省・ミイラ研究所・レイメパン博物館所蔵——高度に文明化されていたインカには文字がなかった。そのため、キープという紐に結び目を作り情報を記憶した。

アンデス文明のミイラ

(紀元900年頃から1440年頃)



「チリバヤ文化のミイラとその副葬品(男性幼児)」ペルー文化省・ミイラ研究所・チリバヤ博物館所蔵——チリバヤ文化では、死後にミイラとなった人々もあまたも生きているかのようにコミュニティの一員として受け入れられていた。

撮影：横井博

「古代アンデス文明展」

国立科学博物館 TBS 朝日新聞

1990年3月、展覧会で鎧型ボトルと出会った

著作権等の都合により
ここに挿入されていた画像を削除しま
した

友枝他『大アンデス文明展』図録
朝日新聞社1989年

著作権等の都合により
ここに挿入されていた画像を削除しま
した

友枝他『大アンデス文明展』図録
朝日新聞社1989年

アンデス文明研究の成果と課題
②博物館をめぐって おわり